文／伊藤悠貴

チェロとピアノのための2つの小品 作品2（前奏曲／東洋の踊り）(1891/1892)

ラフマニノフは幼少時から天賦の才を認められた作曲家でした。
18歳でモスクワ音楽院のピアノ科と作曲科を卒業、その際ほとんど授与されることのない「大金メダル」を与えられ（同期のA.スクリャービンは小金メダル――なんという学年でしょう！）、卒業後すぐにグートヘイル社（モスクワの楽譜出版社）と契約を結びます。

間もなくグートヘイル社はラフマニノフが卒業制作の課題として作曲したオペラ「アレコ」と、「ピアノ協奏曲第1番 作品1」（もともとラフマニノフは“作品1”を「4つの小品」というピアノ作品（1887年）に付けていました）を出版しますが、その次に出版されたのがこの「チェロとピアノのための2つの小品」でした。

第1曲「前奏曲」は献呈を受けたチェリストであるA.ブランドゥコーフとラフマニノフ自身のピアノで1892年に初演されました。全体を通してチェロが美しい旋律を歌い、中間部で動きが増す部分でもそれは変わりません。第2曲「東洋の踊り」には異国風のテーマが与えられ、激しい中間部の後にはチェロの高音が再びテーマを奏で、ピアノの繊細な動きと相まってエキゾチックな美しさを味わうことができます。

幻想的小品集 作品3 (1892)から
エレジー 作品3-1（伊藤悠貴編）／メロディー 作品3-3／セレナーデ 作品3-5（伊藤悠貴編）

「幻想的小品集 作品3」はラフマニノフの初めて出版されたピアノ独奏曲。5つの幻想曲からなり、第2曲には有名な「前奏曲（鐘）」を有します。全曲を通してメロディックな旋律が多く、チェロとピアノでの演奏にも適していると言えるでしょう。ラフマニノフのピアノによる自演録音が全曲残されています。

「エレジー」は美しくも悲愴感漂うメロディーと波打つもう一つの声部、そして情熱的なクライマックスを持ちます。自演録音では楽譜にない音が足されている箇所があり、本編曲に反映いたしました。「メロディー」はラフマニノフらしい旋律と、曲が進むにつれて変化していく段階的なメインテーマの活用、オフビート三連符の和音で構成される美しさが魅力的です。最後の「セレナーデ」は曲の始まりで東洋的な色を感じさせますが、ギターのような伴奏が始まった途端にスペイン風の色を感じることができます。

「メロディー」と「セレナーデ」は、ラフマニノフが亡くなる3年前の1940年に大きな改訂がなされており、「メロディー」に現れる三連符和音のアルペジオへの置き換え、カデンツァの挿入など、また「セレナーデ」においてもより演奏効果の高い作品に仕上がっています。

本日演奏される「メロディー」（ヴラーソフ編）はオリジナル版、「セレナーデ」（伊藤悠貴編）は改訂版を元に編曲いたしました。

前奏曲 作品23-10 (1903)

バッハやショパン同様、ラフマニノフも24全ての調で前奏曲を残しました。
ただラフマニノフの場合、一つの曲集で「24の前奏曲」を発表したわけではなく、前述の「幻想的小品集」第2曲「前奏曲（鐘）」（嬰ハ短調）を最初の前奏曲とし、後に書かれた「10の前奏曲 作品23」、「13の前奏曲 作品32」と合わせた3つの曲集によって全調24の前奏曲を仕上げました。

本日演奏いたします「前奏曲 作品23-10」は元々変ト長調で書かれていますが、A.ブランドゥコーフの編曲でト長調としてグートヘイル社から1905年に出版され、ラフマニノフ公認の編曲でした。

ロマンス (1890)

1992年に出版されるまで陽の目を見なかった「ロマンス」は、1890年の夏、ラフマニノフがまだ17歳の時にイワノフカの地で作曲されました。メロディーメーカーとしてのラフマニノフの才能は既にこの時期から顕著であったことが良く理解できる、作品番号が付く前の最初期の作品です。

6つの歌曲（伊藤悠貴編）

朝 作品4-2（1891/1892）／**夜のしじま** 作品4-3（1890/1892）／
リラの花 作品21-5（1902）／**ここはすばらしい** 作品21-7（1902）／
夢 作品38-5（1916）／**春の水** 作品14-11（1896）

本公演ではラフマニノフの「歌」を最も大事なテーマとしており、今回取り上げるこれらの歌曲は、私が選曲・編曲に多くの時間を費やした分野です。

ラフマニノフは生涯で7つの出版された歌曲集といくつかの未出版曲を書き上げましたが、全ての歌曲は1917年12月にロシアを離れるまでに書かれており（後に書かれた作品40～45のほとんどは管弦楽が関わる大掛かりな作品）、全てロシア語の歌詞を持ちます（母音のみによって歌われる「ヴォカリーズ」を除く）。

「ラフマニノフ芸術の真髄」とも言える歌曲の作品はチェロで演奏するのに適している楽曲が多く、最初に登場する二つの歌曲はラフマニノフの最初に出版された歌曲集「6つのロマンス 作品4」（1893）の中に含まれます。

「朝」はM.ヤーノフの詩に音楽が付けられ、愛の告白（朝焼け＝Zarja（女性名詞）から昼＝Den（男性名詞）への）に朝の風景を見立て、夜が明けると共に情が盛り上がっていく描写が実に美しい作品です。「夜のしじま」は抒情詩人A.フェートの歌詞にラフマニノフが官能的なメロディーを付けた作品で、V.スカロンに献呈されました（前述1890年の「ロマンス」もスカロンに献呈）。愛を歌う濃密なロマンティシズムが詩にも音楽にも溢れています。
次に登場する二つの歌曲はラフマニノフが結婚する直前、1902年4月に書かれた「12のロマンス 作品21」からの選曲です。

「リラの花」の最初のスケッチは1898年に既に書かれており、ラフマニノフ歌曲の中でも高い知名度を誇る作品です。朝靄が残る森に散歩に出かけ、リラの白い花に「たったひとつ」の幸せを求める…E.ベケートワのつつましく美しい詩は、どこか私たち日本人が持つ美的感覚に似たものがあるように感じます。曲の最後では、ラフマニノフが愛奏していた本人編曲のピアノ独奏版からの引用にもご注目ください。「ここはすばらしい」は、“ここには神様と私だけ…”とどこまでも清い静けさと夢を歌うG.ガリーナの詩に付けられた音楽。たった22小節の中に叙情性溢れる至高の一曲は、妻であるN.サーチナに献呈されました。

初期、中期の歌曲の次にお聴きいただくのは、後期の歌曲です。
「夢」は1916年に作られた最後の歌曲集「6つのロマンス 作品38」の第5曲で、F.ソログーブの深い詩をラフマニノフが成熟しきった表現で音にした、真の芸術家のみが生み出せる最高峰の芸術作品です。時に美しく、時に儚い夢の持つ魔力をチェロが描きます。

そして最後は1894年から1896年にかけて作曲された「12の歌曲 作品14」の第11曲、「春の水」でプログラム前半を閉じます。春の訪れを告げる水の流れを描いたF.チュッチェフの詩とラフマニノフの歓喜に満ちた旋律は、力強い思いに溢れています。

チェロ・ソナタ ト短調 作品19（1901）

「チェロ・ソナタ」はラフマニノフが残した最大のリサイタル作品の一つであると同時に、世に存在する全てのチェロ・ソナタの中においても内容・規模共に最高傑作の一つとして広く認知されています。

本作が誕生する前の1897年、「交響曲第1番 作品13」の初演で大失敗したことが原因で神経症にかかり、その後精神科医のN.ダーリ博士の催眠療法によって創作意欲を取り戻し、1901年に有名な「ピアノ協奏曲第2番 作品18」を書いたことはよく聞くエピソードですが、実際にはダーリ博士の治療を受けたのは2回ほどだったこと、また当時難航していた「ピアノ協奏曲第2番」の第1楽章が完成したのは治療を試みた時期から1年以上経過していることなどから、私を含め、最近は暗示療法の効果を疑問視するラフマニノフ研究家も増えています。

また「交響曲第1番」が芸術的に非常に優れた作品であるにも関わらず、なぜ初演は失敗したのか…本当の理由は三つあると言われています。一つはラフマニノフも失敗の理由に挙げているように、その日指揮を担当したA.グラズノフが不勉強のまま本番に臨んだこと（泥酔していたとの言い伝えもありますが、公演の後半で初演されたグラズノフ自身の交響曲

第6番は大成功を収めています)、二つ目はその公演の批評を書いたC.キュイが曲を旧約聖書の「十の災い」に例えて酷評したこと、そしてもう一つはモスクワ楽派だったラフマニノフの音楽が、国民楽派を主流とするペテルブルクの聴衆に受け入れられなかったことです(彼がペテルブルク音楽院からモスクワ音楽院に転校した後、成功したことも反感を買ったのでしょう)。

しかし、そのような辛い経験の後、ラフマニノフはグラズノフの交響曲第6番を2台ピアノに編曲していますし(またこの編曲が素晴らしい)、1908年に再びペテルブルクで初演された「交響曲第2番 作品27」は熱狂を持って迎え入れられています。

…「チェロ・ソナタ」に戻りましょう。

5年ほどのブランクを乗り越え、1900年〜1901年にかけて作曲された3つの傑作のうちの一つである本作では、「2台のピアノのための組曲第2番 作品17」や「ピアノ協奏曲第2番 作品18」と似た芸術性を多々感じることができますが、ラフマニノフが生涯を通じて用いた二つのモチーフの一つ、「怒りの日」の旋律は登場せず、もう一つのモチーフ「ロシア正教の鐘」に関しても、その音とも取れるメロディがところどころに現れる程度に留まっています。

曲は1901年後半に親友でチェリストのA.ブランドゥコーフのために書かれ、同年12月2日にモスクワでブランドゥコーフのチェロ、作曲者のピアノによって初演が行われました。初演後、曲の最後の部分など何箇所かに改訂が施された記録が残っています。

第1楽章:レント − アレグロ・モデラート

チェロの2音で始まるレントの序奏は、「Warum(ドイツ語で「なぜ」)」という隠された歌詞があるとの言い伝えがあり、暗く憂いを帯びたソナタの幕開けは1897年のできごとを思い出しているかのようです。序奏の後には4つにも及ぶテーマが登場し、形やテンポを変えて登場します。初期〜中期のラフマニノフ音楽に頻繁に見られる、燃え上がるようなクライマックスを経て、再度違う調で第2テーマを奏でた後、激しい情感を持って楽章を閉じます。

第2楽章:アレグロ・スケルツァンド

ハ短調の暗いスケルツォの出だしに登場するテーマはラフマニノフが好きだった電車の描写とも言われ、夜の大地を電車が進んでいくレールの音のようです。すぐ後に登場する甘美な旋律は、電車に揺られながら夢を見ているさま、そして流れるような美しい中間部は、夜明けとともに窓に映る雄大な景色に心打たれるさまを描いているかのようです。

第3楽章:アンダンテ

本作中最も親しみやすく、抜粋で取り上げられることも多い叙情楽章ですが、幅広いテクスチュアを持ち、チェロとピアノの見事な掛け合いから織りなされる完璧なまでの“美”は、“ラフマニノフ音楽に特化した奏法”でのみ表現することが可能であり、奏者には極めて高度な音作りが求められます。

第4楽章:アレグロ・モッソ

冒頭から春の訪れを感じさせるような明るく希望に満ちたフィナーレ。輝くような第1テーマは甘美な第2テーマへと続いていきます。情熱的な中間部を経て、テーマが完全再現されるといよいよ曲は終盤へ。コーダに入ると、紡いできた物語を思い返すかのような足取りを見せますが、最後は第1楽章のテーマが現れると瞬く間に変化していき、エネルギーの渦の中で壮大に幕を閉じます。

チェロの長い優雅な旋律を奏でる特性を十二分に生かし、それをピアノが更に引き立てる見事なアンサンブルを実現した、ラフマニノフの大作「チェロ・ソナタ」は、私がチェリストを目指すきっかけとなった曲であり、同時にこれまで多くの思い出深いステージを共にしてきました。

たくさんの素晴らしいピアニストと共演した思い出の中でも、人生で最初にこの作品を聴いた録音でピアノを演奏していたV.アシュケナージ氏と共演させていただいた思い出は、今も昨日のことのように心に残っています。